

## まえがき

——『加藤周一現代思想研究センター報告』準備号の発刊に寄せて——

加國 尚志  
鷺巢 力

### 加藤周一現代思想研究センターと加藤周一文庫

立命館大学の加藤周一現代思想研究センターは、その名前の通り、戦後日本を代表する国際的知識人加藤周一先生（1919-2008）に因みます。1988年に本学国際関係学部が創設されたときに、立命館大学は加藤周一先生を同学部の客員教授として迎えました。そして2000年までの13年間にわたって立命館大学で教鞭をとっていただきました。その間、1992年から95年までは立命館大学国際平和ミュージアムの初代館長も務めておられます。2008年に加藤先生が亡くなられ、2009年に東京で「お別れの会」が催されることとなり、立命館大学はその実行委員会に加わり、「お別れの会」に川口清史総長（当時）が参列いたしました。

加藤周一先生と立命館大学とは、長いあいだの信頼関係を保って参りました。このような関係を尊重していただき、2010年に加藤先生の御遺族は先生が遺された膨大な文献・手稿ノート・書簡や写真・その他資料類を一括して立命館大学図書館に寄贈されました。

立命館大学は、図書館を中心に、寄贈された文献・手稿ノート・書簡や写真など資料類の整理を始めるとともに、これらを基にして研究活動を始めることといたしました。こうして2015年に衣笠総合研究機構に「加藤周一現代思想研究センター」が発足することになりました。また平井嘉一郎記念図書館が開設されるのに合わせて、2016年に同図書館内に

「加藤周一文庫」を創設いたしました。

加藤の遺した文献や資料を受け入れることに御尽力されたのは、吉田美喜夫図書館長(当時)と武山精志図書館次長(当時)でした。その後、それを引き継いで中心になって活動されたのは、今は亡き渡辺公三副総長(当時)でした。渡辺副総長は、加藤が遺した文献やノートや資料類は、たんに立命館の財産というだけではなく、社会的財産なのだとなげねいわれていました。そして加藤周一文庫を「活きた文庫」にすることを方針に掲げ、加藤周一文庫と加藤周一現代思想研究センターを拠点とした加藤周一研究とその社会的発信を唱えつづけられました。

その後の「加藤周一文庫」と「加藤周一現代思想研究センター」を拠点とする活動は、この渡辺元副総長のお考えに基づいております。こうして毎年多くの市民たちに参加していただいている「加藤周一記念講演会」や「手稿ノートのデジタルアーカイブ化」(2023年3月現在で34冊のノートがデジタル化されます)が進められてきました。また鷲巢力・半田侑子(編著)『加藤周一 青春ノート』(人文書院、2019年)や、鷲巢力(編)『称えることば 悼むことば——加藤周一推薦文・追悼文集』(西田書店、2019年)、『丸山眞男と加藤周一——知識人の自己形成』(筑摩書房、2023年)などが刊行されました。さらには東京女子大学の丸山眞男記念比較思想研究センターや東京大学東アジア藝文書院(EAA)との研究提携や共同研究も進めてまいりました。ここには具体的には書きませんが、加藤周一現代思想研究センターでは、並行して数々の研究会も行われてきました。

### 『加藤周一現代思想研究センター報告』刊行に向けて

しかし、残念ながら、私たちの力量不足と資金不足から、それら講演会や研究会は、それぞれ何らかの形で記録し、公に報告するということができませんでした。そのことについて、私たちは忸怩たる思いでおり

ました。ようやくそれらの記録を刊行物として残しておくという事業に取り組むことができる段階に到りました。まだまだ至らぬところはたくさんあることと存じます。それでもここまで来られたのは、この間ずっと御支援を続けてくださった方々のお力添えのたまものと理解しております。また加藤周一文庫と加藤周一現代思想研究センターの力が、それなりについてきたことの表れだとも考えています。

ここにお届けするのは『加藤周一現代思想研究センター報告』準備号の刊行にすぎません。それは小さな小さな一歩です。しかし何事も小さな一歩からしか始まりません。この小さな一歩を糧にして、私たち自身の課題を見つけ、そこから虚心に学び、かつ読者諸賢の忌憚のない御意見やお力添えをたまわることによって、大きな旅に向いたいと存じます。今後とも御支援御鞭撻のほどなにとぞよろしくお願い申し上げます。

2023年2月20日

(かくに たかし 加藤周一現代思想研究センター長)  
(わしづ つとむ 加藤周一現代思想研究センター顧問)